

(2)事業の総括概況

本学校法人北星学園の2015年度における事業の運営総括概要は、以下のとおりである。

2015年度 学園運営総括

理事長

はじめに

北星学園は2015年度を歩み出すにあたって、「地の塩、世の光として」を学園目標に据え、またそのことばが登場する「マタイによる福音書5章13, 14節」を学園聖句としました。2015年は、日本現代史のなかでは戦後70年にあたり、日本社会全体が70年の歩みの意味を問われた一年でありました。しかし、政治・社会風潮のなかには、むしろ歴史の教訓に逆行する動きさえありました。そうした中で、この学園目標と学園聖句は、「創立以来先人たちが目指してきた教育目標—世界に目を向け、地域に貢献し、平和を作り出す人間の育成—」（2015年度学園運営方針）の営みを強く支えるものでした。また、すでに「ことにあたっては必ず建学の精神や学園の歴史の教訓に立ち返る」（2014年度学園運営総括）ことを確認していた学園は、2015年9月の『北星学園広報』第364号において「戦後70年にあたって」を発表し、1995年に出された「北星学園平和宣言」を再確認しました。

また、2015年は、学園創立の祈りや志を、恵まれた仕方で再確認する年ともなりました。スミス先生の出身教会エルマイラ第一長老教会（ニューヨーク州）と永眠の地パサデナのアルタディナ第一長老教会（カリフォルニア州）と学園の公的交流はしばらく中断していましたが、2015年初夏、理事長・女子中高校長・事務局長が表敬訪問することができました。エルマイラではスミス先生を送り出したことを誇りにし、今でも北星のために祈ってくださる、パサデナでは、近隣在住の同窓生の方々と共に墓所を大事に守っていて下さる、特にエルマイラのように一世紀半近くも昔に異郷に赴いた出身宣教師のことを覚え、その宣教師が建てた学校のために祈ってくださいます。そのような関係はキリスト教主義学校のなかでも稀有な事例といっても過言ではないでしょう。私どもはこのことを学園に注がれた特別な恵みとして、受け止めたいと思います。

以下7項目は、学園運営方針・計画に対応するものです。

1. 「建学の精神」の現代化による新しい取り組みについて

スミス先生が「学校の根本理念」を書かれたとき、目の前には19世紀80年代の赴任地日本（札幌）の実情がありました。しかし、そのことばを歴代の後継者たちが大切にしてきたのは、そこに時代を越える内実と訴えがあったからに他なりません。後継者たちはそれぞれの時代のニーズに応じてスミス先生の目指したものを「現代化」しようとしてきました。私どもが直面している現代の教育の重い課題のひとつは、IT技術の革新に伴う社会・文化状況の変化に曝されている世代への知識・文化の伝達のあり方でしょう。それらの努力の一端は、『北星学園報』・『北星教育』、あるいは各校のパンフレットやホームページで知ることができます。大谷地キャンパスではラーニングコモンズやIT機器へのアクセスも考えた学習空間の整備は努力の一例であり、各高校・中学では学園から援助される「政策予備費」による対応が目指されています。

そうした各校の取り組みに加え、それらを支えるためには学園の組織体制や財政構造の整備は不可

欠でありながら、未だ努力の途上です。来年度以降も引き継がねばならない課題です。

2. 一つの学園としてのより緊密な連携強化について

学園内教育連携委員会においては「学園内教育連携活動の基本方針」に基づき、当初よりその推進について協議してきました。その具体化策として、大学、短期大学部では「学園内高等学校推薦入学者の成績等個人情報の開示」に取り組み、本年で2年目を迎え、推薦入学者の情報把握と学習力向上に務めてきました。また、学園の生徒、学生が交わる場や機会を設定するという方針に対しては、12月11日に初めてクリスマス・ジョイントコンサートを実施しました。計画から実施までの期間が短かったにもかかわらず、主として余市高校や附属高校の生徒・教職員の精力的な企画によって楽しいコンサートが催されたといえます。当日は約120名の一般参加者がありました。

また、2009年度より中等教育部門の教育充実策として予算化した政策予備費は、2014年度より新たなスタートとして、向う3年間で各年2000万円を計上してきました。この年度はその2年目にあたり、受験指導、学力向上、教職員の指導力や生徒募集対策の強化に一定の成果を上げました。その他、学園内各校の見学会として、当委員会のメンバーが余市高校の学校祭や女子中学生による商品開発発表会に参加しました。12月1日には各校が一斉にクリスマスツリー点灯式を実施するなど、学園内の連携活動が徐々に進んできておりますが、更に大胆、かつ、きめ細やかな取り組みが必要です。

3. 学園の将来構想の構築について

中等教育部門については、主として「余市高等学校の今後のあり方」を常任理事会において前年度から継続して検討を重ね、理事会での審議を経て、「2016年度の1年次入学者数が90名に達しない場合には、2018年4月以降の1年次の生徒募集を停止する。」ことを2016年5月の理事会に上程する旨を確認しました。この方針を2015年12月に学園教職員及び学園評議員会に対して説明を行ったところです。

女子中高及び附属高校については、各校別の教育活動状況並びに年度別の入学者数及び財務状況等の推移が総合企画委員会から常任理事会へ報告されました。これらは2010年11月総合企画委員会答申「中等教育部門（市内2校“学校づくり”）」以降の継続的課題として年次的に照らし合わせながら今後の方向性を探っていくこととなります。

高等教育部門については、大学・短期大学部の各委員会等において「教育システム及び内容の充実」に向けての検討と具体的取り組みが進められましたが、そのことを法人として直接的に関わって支援を行うなどには至りませんでした。

4. 財政健全化への取り組みについて

ここ数年にわたって計画的に取り組んできた各校校舎等の建築及び耐震・改修・補修等の工事はほぼ終了し、それに伴う資金の借入とその元利返済計画が確定しました。また、校舎面積の増加に伴って、光熱水費及び校舎等の減価償却費を含む維持管理費についてもその支出金額が明らかになりました。

これらの状況を踏まえて、女子中高及び附属高校においては「中期財政試算」を行いましたので、今後はその内容の点検を進めていきます。高等教育部門においても校舎建築に関連する財務状況見通しがほぼ確定したので、今後は財政全体の計画づくりに取り組むこととなります。

学園の財政健全化のためには財務構造の転換が必要であるという認識から、その中心的課題としての人件費（給与体系）のあり方の検討を学園人事制度検討委員会を中心として進めています。今年度は全教職員対象の「アンケート調査」を実施し、引き続いて学園の現給与体系の分析等を進めています。

次年度は新給与体系の骨格をまとめ、それに基づく財務計画づくりのための試算が総合企画委員会によって行われる予定です。

5. 北星学園キリスト教センターの運営について

キリスト教センターが開設されてから4年が経過し、その区切りとしてこの間に収集した学園関係の資料を『所蔵資料目録』として刊行しました。その作業過程で、学園内に散在する資料について全体として把握できたことは成果といえます。また、『北星学園大学五十年史』や学園創立130周年に向けての記念誌の作成にかかわることができました。センター研究会は7月に『北星学園のアーカイブズ』について、鈴江英一氏の講演会、9月には「スミス先生の足跡を訪ねて」と題して、エルマイラ、パサデナを訪問した大山理事長、浅里女子中高校長、樋田事務局長による報告会を開きました。また、センター報『北星教育』と年報『北星教育と現代』（4号）を予定どおり発行しました。年報では戦後70年の節目でもあり、平和教育を特集しました。更に年度末には、「学園内推薦入学者の会集い」を昨年を引き続いて開催し、各校から102名の参加がありました。これらの学生たちの大学、短期大学部でのキリスト教活動への積極的な参加が期待されます。

総じてセンターは「建学の精神」の実現に向けてその理念や実践の発展に務めてきましたが、引き続き学園内にその役割の認識や活動を浸透させていく責任を負っています。新たなスタッフを配置して、更なるキリスト教教育の前進のために体制を整えているところです。

6. 事務組織体制の見直しについて

前年度から継続課題として取り組んできた事務組織体制の見直しについては、主として法人と大学・短期大学部との管理部門及び教学部門の全てにわたって検討を行い、新年度から実施に移しました。その概要については次のとおりです。

管理部門については、法人業務の充実、補助金の計画的獲得及び地域連携の充実などを図るための企画立案機能の強化、教学部門については、学生に対する支援体制を強化するために、教育支援課、学生生活支援課及び国際教育課を独立させ、それぞれの機能を充実させることにしました。

更には、大学・短期大学部の教学部門のマネジメントを充実させるために「大学事務部長」を配置するとともに課・室別職員の再配置を行いました。

7. 危機管理対応について

大学非常勤講師の雇用に伴う学外からの抗議・脅迫等に対応するために、臨時的措置として学園に危機対策本部及び法人課を設置しました。具体的には学園と大学・短期大学部との連携による警備・監視員及び危機対応要員の配置並びに警備・監視のための機器の設置などです。

これらの取り組みについては、特に、大学・短期大学部関係機関等の協力のもとで、キャンパス全体の安全と教育・研究環境が守られましたことを感謝します。

以上